

2019年8月11日 奨励（川越キリスト教会平和月間）

言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる
『小さな抵抗 殺戮を拒んだ日本兵』を読む

飯塚岳夫

【聖書】ルカによる福音書 12章 8節～12節

「言うておくが、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言ひ表す者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を自分の仲間であると言ひ表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言ひ表す者は、神の天使たちの前で知らないと言われる。人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されない。会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう言ひ訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」

(1) 聖霊がそのときに働いて下さる

今日の箇所、主イエスは弟子たちが迫害に遭うことは避けられない状況にあることを予想した上で、迫害に遭っても、人々の前で自分はイエスの仲間だとはっきり言え、とおっしゃっています。また、自分はイエスの仲間だと思っけていても、目の前にいる人々が、怖そな、武器を持った大勢の人々だったりした時、イエスの仲間ではないと言っけてしまったり、黙っけてしまったりすれば、人々はあなたに危害を加えないだろうが、しかし主イエスは最後の日に天使たちの前であなたを知らないと言っけることになる、とおっしゃっています。人の前で、堂々と信仰を告白しなさい、信仰は一人でひそかに信じているというものではない、ということでしょうか。次の聖句もむずかしいです。「人の子の悪口を言う者は皆赦される」。生前の主イエスを理解できなかったのはしょうがない、赦されるというのでしょうか、「しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されない」。ある聖書、フランシスコ会訳ですが、訳注には、「イエスの死と復活、昇天が実現し、初代教会の活動の原点となる聖霊の働きを否定することは、イエスの救いの業とその意味の否定につながる」とありました。厳しい迫害の下では、本当に神さまは存在するのかと疑いが生じたり、神さまの存在が見えにくくなるなど厳しい状況におかれるかもしれませんが、しかし、そのような状況でも、主イエスは、聖霊を冒瀆するな、神さま・聖霊の存在を否定する者になるな、とおっしゃいます。

迫害する者たちに捕らえられたときでも、何をどう言ひ訳しようか、何を言おうかなど心配しなくてもよい、言うべきことは聖霊がその時に教えて下さり、働いて下さるから、とおっしゃっています。

(2) 渡部良三『歌集 小さな抵抗 殺戮を拒んだ日本兵』

迫害を受けた時、聖霊が働いて下さる。そのことを証した本に昨年出会いました。渡

部良三著『短歌集 小さな抵抗』。副題が「殺戮を拒んだ日本兵」(岩波現代文庫。2011年発行)。この日本兵は先のアジア太平洋戦争時に学徒出陣で中国に配属されたキリスト者でした。かんたんにご内容を紹介しますと、著者渡部良三は1922(大正11)年山形県生まれ。2014年(平成 26)92歳で亡くなっています。中央大学在学中に学徒出陣(1943年)で中国・河北省の駐屯部隊に配属され(陸軍二等兵)、中国人捕虜を銃剣で突くという刺突くしとつ訓練の時にキリスト者として捕虜殺害を拒否したので、凄惨(せいさん)なリンチを受けました。その一部始終も含めて、戦場の日常と軍隊の実像を約700首の歌に詠み復員時に持ち帰りました。学徒出陣以前の歌、敗戦と帰国後の歌も含めて計924首の歌は、戦争とその時代を描く現代史の証言として出色です。戦後は国家公務員として勤務。定年退職後に本格的に歌集を編み上げました。戦場においても、人を殺してはならないという信条を曲げなかったキリスト者の稀有な抗(あらが)いの記録です。

新兵たちが上官の命令で捕虜虐殺に従う中、渡部良三はどのように拒否を貫けたのか、彼のどのような信仰が拒否の行動を支えたのか、そこを知りたいと思いました。

(3) 捕虜虐殺

陸軍では新兵教育として、中国人の捕虜を殺す殺人演習が行われていました。配属されてから2か月ほど経ったある日の朝食の時に、分隊長補佐(上等兵)から「今日は教官殿のご配慮によりパロ(八路。中国共産党第八路軍の略称)の捕虜を殺させてやる。…」と知らされます。人伝には聞いていた殺人演習が今日現実のものになろうとは思ってもみなかった、と渡部良三は書いています。引用を続けますと『身を貫く驚愕は食物の嚙下(えんか・えんげ)を不可能にした。もちろん昼食もほとんどとれなかった。驚愕と戸惑いと共に、どうにかならないかという漠然たる想念の堂々めぐりの中で、最も重要な位置を占めていたのは、この殺人演習を拒否すべきかであった。小さい頃から、自分の命も他人のそれと同等に置けない人間は、神の教えに背くものだと躰けられてきたことに思いを致せば、当然、聖書の“汝殺す勿れ”をあげる迄もなく、答えは拒否の一字しかないのに、自分がどうしたらよいのかなどと考えること自体異常であった。私は殺人をしなければならないという現実を前に、全くどうしてよいか分からないという状況にいた。今ここに親爺がいたら何らかの助言が得られるのに……、そんな気持ちで父の言葉や父が語ってくれた内村鑑三の言葉を想起していた。22歳にもなって……と笑われるかも知れませんが、わたしの実相でした。このような想念の堂々巡りをくりかえすうちに、教官の訓示が始まった』。

“今朝戦友(とも)と 掘り上げたりし大き穴 捕虜の墓穴とは 思いよらざり”

5人の捕虜を新兵49名、教官1名で虐殺する。1人の捕虜を9名か10名で殺すことになります。この日午前中に渡部たちが掘った穴の前に新兵が5つのグループに分かれて並んで、捕虜たちがひとりづつ連れてこられます。

“「刺突(しとつ)の模範 俺が示す」と結びたる 訓示に息をのみぬ 兵等は”

『一人目はまだ15, 6かせいぜい17, 8歳の、まことにかわいいと言ってよい子どもに見えた。少年は現場の雰囲気から殺されるとわかったらしくいきなり大声を上げる』。恐らく中国語で「助けてくれ」と叫んだと思われませんが、片腕を杭に縛り付けられたまま動き出したので、穴に落ち、骨折か脱臼をしたようなのですが上官がかまわず穴から引き上げる、改めて残る片腕を固定しました。

“「刺突(しとつ)銃を呉(く)れ！」猛き声あり教官の 手のいださるるを見つつ すべなし”

刺突銃とは、壊れて銃弾が狙った方向に飛ばなくなった戦闘に使用できない小銃を、銃剣と共に「捕虜刺殺専用」としたものでどの部隊にもあったといえます。

『教官から刺突銃を渡された新兵は、突撃と号令されて走り出したがその後ろ姿はまるで老いのよたよた走りそのまま。気合もかすれて声にならない。突き出した銃剣はごつっという鈍い音と共に肋骨で止まった。失敗である。教官の罵声が飛ぶ。「両手足を縛ってある。少しも抵抗せん！ おたおたするな。やりなおし！」。捕虜は 10 人の初年兵に刺突(しとつ)され檻褸(ぼろ)のようになって、塚穴に消えた。』

“刺し殺す捕虜の数など案ずるな 言葉短く「まじくりに突け」”

“纏足(てんそく)の女(おみな)は捕虜のいのち乞えり 母ごなるらし地にひれふして”

“獣(けもの)めく気合するどく空を載る 刺されし八路(ぱろ)の叫びきこえず”

“主の裁き 厳しかるべし殺さるる 八路を見つつ黙しおおせば”

(4) 渡部良三の父と信仰

クリスチャン渡部良三の信仰の背景をみてみますと、出身地が山形県小国町です。この小国町には無教会キリスト教内村鑑三の弟子、政池仁(まさいけじん)鈴木弼美(すずきすけよし)の伝道が昭和の初年頃から続けられました。1934(昭和9)年鈴木弼美が基督教独立学校を開校します。この小国伝道を支えたのが良三の父渡部弥一郎でした。政池、鈴木それぞれ、国からの徴兵には従っていますが、政池は非戦論、鈴木は「殺す勿れ」を絶対守る姿勢だったようです。父弥一郎も「殺す勿れ」を軸に、戦争は多数の人を殺戮するから罪悪なのだとか明快な主張をしていたということです。事実 1944(昭和19)年反時局的言辞により鈴木弼美と共に逮捕されています。

良三に父は、「いかなる困難に遭遇しても、神の存在を疑うな。神は必ずお前の避けどころを用意してくれる」と繰り返して言っていました。それを良三も覚えていたといっています。また盛岡の部隊に入隊するために東京から盛岡へ向かう途中、山形駅の近くの旅館で父と数時間を過ごしています。父は「一介の兵士として、人間として、神さまの御心に適う行動をする余地があるはずだ。それを知るためにも、常に胸を開き神さまに祈ることを忘れないでくれ」と言い、内村鑑三のことば「事にあたり自分が判断に苦しむことになったら、自分の心を粉飾するな、一切の虚飾を排して、ただひたすらに祈

れ。神は必ず天から御声を聞かせてくれる」のことばを送ったといいます。

“声細め 生命(いのち)いたわれと 言う母の 瞳に雲も雪も映れり”

“反戦をいのちの限り闘む 心を述ぶる 父の面(おも)しずか”

“子よ死ぬな 生きて還れ」と父言い 逃れ処(ど)のなき 征でたちの夜に”

良三自身は、確固たる反戦思想などはなかったといいます。だから、捕虜刺突(しとつ)の際に、どうすべきか迷い、ためらいなのか、堂々巡りの思慮を、その朝から7時間していた、と言っています。「今に至るも、なぜ、自分の志を通すことが出来たのか、私自身さえわからないところがある」と言っています。

(5) 5人目の捕虜虐殺

『4人目の捕虜の惨殺もすでに終わり5人目の捕虜を一番最初に刺突(しとつ)するのが自分になると計算していた。その事が分かった時、衝撃的に、山形駅で父と別れた時の父の一言が蘇えます。「神様を忘れないでくれ、事に当たって判断に窮したならば、自分の言葉で良いから祈れ、信仰も思想も良心も、行動しなければ先細りになるばかりだぞ…」』

『良三は今更のように、父のその一言に力を得て祈りを始めます。唯一言「神様、道をお示し下さい。力をお与え下さい」。それは今なお忘れかねる、幼児の祈りにも似たつたない貧しい祈りと願いであった。

つぶやきとも独り言ともつかぬ祈りの中で、中国大陸における黄塵襲来前に聞く大地の深处でとどろく、重く籠ったような音とともに、自分の体全体が巨大な剣山で挟み付けられたと思うような激痛と共に、神のみ声を聞いた。「汝、キリストを看よ。すべてキリストに依らざるは罪なり。虐殺を拒め、命を懸けよ！」

そうだ、祈ろうと、考えようと、虐殺を拒むこの道しかない！すでに四人は殺され、もう一人は確実に殺される。この捕虜と共に、この素掘りの穴に朽ちることになろうとも、拒否以外に選択肢はない。殺すものか！……。』

“祈れども 踏むべき道はただ一つ 殺さぬことと 心決めたり”

“血と人膏(あぶら) まじり合いたる臭いする 刺突(しとつ)銃はいま我が手に渡る”

“虐殺(ころ)されし 八路と共にこの穴に 果つるともよし 殺すものかや”

“鳴りどよむ 大いなる者の声きこゆ 「虐殺こばめ生命(いのち)をかけよ」”

『時間の流れは自分の想念とはかかわりなく流れ、血と油で赤黒く光る刺突(しとつ)銃が私の手に渡されていた。今でも私に銃剣を渡した同年兵の声は耳に残っているが、自分がいつどのようにして刺突銃を握ったのか覚えていないし思い出せない。そして「信仰」を挟んで教官との問答となった。

「おい渡部、お前は信仰のためにパロを殺さないというのか！」どすのきいた大声と

眼球の飛び出しそうな厳しい目つきであった。

「はいそうであります」彼の一言は、途方もない大声で四方に響き渡った。

以後の私は、一切の資格がはく奪され、時に人間扱いさえ受けられず、敗戦し復員時にもなお「大日本帝国陸軍二等兵」(最下級)であった。

当日は唾を吐きかけられ胸ぐらをこずきまわされたが、教官の一言「処分はあとですから演習を続けよう」で事態は進行した。後日軍事裁判にかけられたでもなく、上官や古参兵からのリンチが続きました。信仰がなんだ、そんなものは天皇陛下に対して不忠になるだけだ、戦友の侮り驚き蔑み、連日連夜のリンチは通信兵になって転属するまで続いた。リンチの時はロマ書 5 章 3-4 節「**艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず**」を心の中で繰り返すことで耐えた。』

“むごき殺し拒める新兵（へい）の知れたるや 「渡部（とうべい）」を呼ぶ声の増えつつ”

“小さき村の辻をし行けば もの言わず梨さしいだす老にめぐりぬ”

捕虜虐殺を拒んだ新兵がいたことがその村（東巍家橋鎮 とうぎかきょうちん）に知れ渡った。村人の中から「渡部（とうべい）」と呼ぶ声が広まったといえます。渡部がどんな仕打ちを受けるか村人もわかっていたのでしょうか。渡部が村を歩くと、渡部に無言で梨を差し出す老人がいた。殺さないことが平和をつくり出す。

渡部良三は、『捕虜虐殺の際は神の御導きにより虐殺を拒みえたが、ただそれだけのことで、汝殺す勿れの御教えを上官にも戦友兵士にもひとことも説かなかつたばかりか、女密偵の拷問、焦土作戦後の掃討行動における略奪強姦老幼を問わぬ殺人を目にしながら、口を閉じ制止さえしなかった。出征にあたって父が諭してくれた「行動のない信仰思想良心は先細りだぞ」を踏まなかった、戦地における沈黙は大罪だったという思いが年々深まるばかり、年月は嵩（かさ）み戦争経験者も年々減ってゆく事態と思い合わせ、一の孫がまだ小学校の低学年の時「おじいちゃん戦争って怖い？」と問われた時、この孫にはせめて歌集だけでも残したいと思い（1992年）歌集『小さな抵抗』私家版を上梓した』と書いています。この岩波現代文庫に『克服できないでいる戦争体験』という講演（1995年 青山学院大学）が載っています。天皇の戦争責任、国家総動員法の残滓、憲法 50 年の歩みとその歪ませ方、軍拡の論理、今日の問題がそのまま、当時の問題提起と重なっています。今から 20 年前の状況が現在では悪い方向へ進んでいます。

残り少ない人生ですが、主イエスの言葉を学び、平和、戦争、天皇制、核の問題など現在より良い方向に事態が進むように「行動ある信仰思想良心」を心掛けたいと思わされました。

（了）